

資 料

いわての伝染病・中毒症をひもとく (その十七)

梁 川 病

岩手大学獣医病理学研究室

沼宮内 茂

梁川病が獣医師や馬産家の注意を引くようになったのは、大正11年来のことで、本病罹患馬は1年100頭余りになったと言われています。それ以来、発生は増加し、馬産地の一大脅威になりました。本病は、独立した病気なのか、本来からある疾患が変形したものなのか、大きな問題だったようです。

本病の原因究明のため、盛岡高等農林学校開学以来、各学科の教授たちにより現地であらゆる生物、植物の調査が開始されました。梁川病の発生が多く見られたのは、飛鳥牧場でした。その牧場内に自生する高等植物の調査をした結果、高等植物は84科358種でした。馬が最も好んで食べるものは、ヌスビトハギ、ヤマハギ等の78種類、また、禾本類等もよく食べていました。

寄生菌類調査では、7菌種が発見され、その中で最も本病に関係しているのは、シバクサ麦角菌ではないかと考える先生もおられたそうです。麦角菌が原因と思い、関係の先生方が麦角菌を培養し、外科の先生が脳に直接接種試験をされたこともありました。しかし、実験からは本病と関係がないことが突き止められました。その後原因に結びつくものは、何も見あたらないまま、長い年月を費やしたとのことでした。

昭和27年に三浦定夫先生が病理学教室に赴任され、馬の奇病とされていた梁川病の原因究明に乗り出されました。文部省の科学研究費に採択されて調査が開始されました。従来梁川病は、

菊池賢次郎先生により、病理解剖学的には、多発性神経炎が特徴といわれていました。菊池先生は、三浦先生の梁川病のワラビ給与試験には反対だったようです。実は、菊池先生は以前にワラビ給与試験を実施していましたが、何の発見も見られなかったからです。あらゆる文献を調べて、三浦先生は現地がワラビ繁茂地帯であることから、「これはワラビ摂取による馬のビタミンB₁欠乏症、いわゆるワラビ中毒ではないか」との疑いをもたれたようです。その立証のために、馬に対しワラビ給与実験を試みることとなりました。というのは、その頃、ワラビを含めたシダ類中にビタミンを溶かす酵素が含まれていることが盛んに報告されるようになり、その点が注目されたのです。そのため実験当初から、特に農芸化学学科栄養化学教室の小柳先生や晴山先生に実験馬のビタミンB₁検索についての協力をお願いしました。

この梁川病が契機になったと思いますが、私は三浦先生に乞われ、昭和27年より実験に参加することになりました。この実験を始めるに際し、長期に渡ってワラビを給与するため、大量のワラビを集めなければなりません。高地で刈り取ったワラビをどのようにして運んでくるか、それが一番の問題でした。幸いに、梁川村出身の川村保重さん(昭20卒)にお願いして刈り取ったワラビを山から道路まで下げてもらい、三浦先生、村上大蔵先生、私の三人が、大学のトラックで運搬したものです。その後、

ワラビがなくなる度に、教室の学生達と現地に刈り取りに行き、ひとり10kgほどのワラビをかつぎ、山から運んでくるという苦勞もしました。

ワラビの「ホダ」50%と乾草50%を混合した給与試験を、11月中旬から始めました。当時ワラビは人間が食べる物で、馬はワラビなど食べないと言われていたようです。確かに当初、馬はワラビなどを見向きもせず、乾草だけを採食していたのですが、そのうちに乾草もなくなり、ついには空腹に耐えかねてワラビを食べ始めました。その結果、2週間で沈鬱になり、2週間目の後半には興奮して私や学生にか噛みつく仕草をするようになり、3週間目の後半には腰が麻痺し、翌朝の給与時には犬座姿勢をとるようになりました。それは梁川病の特徴的な症状であると思われましたが、三浦先生が菊池先生に起立不能になった様子を知らせにいくと、先生は、「それは梁川病で成ったのではなく、足を滑らせて、骨折したのだろう」とおっしゃったそうです。そこで以前より本病についての経験者として知られた臨床家の藤村獣医師を呼んで診てもらったところ、一目見ただけで「これは、まさしくあの奇病の梁川病である」と太鼓判を押して頂きました。

とにかく、実験の結果は以上の通りであり臨床所見はもとより、死後の解剖でも体内至る所に梁川病と全く同様の変化が認められました。

ある程度予測はしていたものの、実験馬にビタミンB₁欠乏が見られた事が重要な点でありました。これについては、この実験に協力された前記の小柳先生や晴山先生により、ワラビ給与馬の体内におけるビタミンB₁が経過に伴って著しく減少していたことが明確に証明されました。結局、長年原因不明の一地方病とされていた、いわゆる梁川病は、ワラビ繁茂地帯における降霜期放牧という特殊環境下において起こった、馬のビタミンB₁欠乏症であることが立証されたのです。この研究は、当時の中央紙をはじめ地元新聞にも大々的に取り上げられました。

また、分析用のワラビをどうしても欲しいと晴山先生に言われ、飛鳥牧野（区界）に採取しに言った帰りの汽車で、乗り合わせたおばあさんに「ワラビは春に食うもので、今乾燥したホダなどを食うもんでねがंस。今食うのなら、ワラビは根っこを取ってきて、粉にしてモチっこにするもんだ。大学の先生だずは、ものを知らねっす」と教えられ、笑われたものです。

昭和28年11月から翌29年1月まで、正月も返上してワラビ給与実験に没頭しました。この実験中、馬はみるみるうちに削瘦して不憫でしたが、今思えば、最後まで根気よく正確にエサを与えたことが、実験の成功につながったものと信じています。